葉山町立南郷中学校

研究テーマ：考えて行動できる人(子)を育てる系統的な学び～探究課題の発見と解決を通して～

１　実践の目的

研究テーマ「考えて行動できる人（子）を育てる系統的な学び」は、令和７年度の施設分離型小中一貫教育の開始に向けて、研究主題を小学校と連携し、９年間を通した総合的な学習の時間の系統的な学びのカリキュラム構築を目指したものである。

小中で総合的な学習の時間の研究を継続し、「生徒の興味関心に基づく探究課題の発見と解決を通して」を副題として、教科・学年横断的な校内研究を進めた。

２　実践の内容

教育目標（９年間で育てたい子ども像）を同一にしたものの、小学校と中学校の教職員が本当の意味で共通理解できていない状況があったため、合同研究会を開き学区の児童・生徒の様子や育みたい力を協議し、教育目標の具体化を図った。児童・生徒の実態を踏まえた課題に対する取組として、「対話的」「問いをもつ」「表現力」などのキーワードが浮かび上がってきた。また、「探究的な学び」が最も大切であるとの共通認識も持つことができた。それをつくりだすことができれば、私たちの目指す目標に近づくのではないかと再確認する機会となった。

実践として、以下の３つに取り組んだ。

①「生活科・総合的な学習の時間」の９年間の全体計画やカリキュラムの作成

②小中同一形式の単元構想図や学びのサイクルの追究

③教職員が９年間の児童・生徒の実態や必要な教育内容を理解するための授業実践

①については、これまで２年間、小学校とともに検討を重ね、学ばせたい内容（探究課題）と付けたい力（資質・能力）を見据えた９年間のカリキュラムの修正を行なってきた。

②については、小学校１年から中学校３年まで同じ単元構想シートの型を用い、学びのサイクルを可視化し、共有した。それにより「知りたい、やってみたい。」という児童・生徒の思いから始まる探究的な学びを追究しやすくなった。また、昨年度の実践を足跡カリキュラムとして追記して振り返ることにより、今年度の取り組みに生かすことができた。

③については、小中合同で授業研究を行うことで、中学校の総合的な学習の時間の授業の様子や内容を小学校の教職員が把握し、中学校の教職員が小学生の発達段階に合わせた授業を目の当たりにすることで、理解を深める良い機会となった。特に、小学校高学年から中学校へつながる学びを具体的に共有できたことは、小中一貫教育へ向けての大きな成果となった。

南郷中学校としては、３年間を通して葉山町についての探究をより深め、自分たちが住む町に対する思いを強めていけるように探究課題を設定した。まずは葉山町を見て歩き、理解を深めるところからスタートした。そこから課題を見出し、自分たちにで

きることを企画・実践することで、町と自分とのつながりを感じ、地域のために行動する心を育てることを目標とした。
　以下に、各学年の実践を紹介する。

第１学年　単元名
「葉山 feel 度 walk」
　学習のゴールを「自分たちが住んでいる葉山町の現状を知り、より良くしていくための概念を形成する」とした。町内を歩き回りながら「なんとなく気になる」と思ったものを記録し、地域の現状と自分たちの生活との関わりに興味を持ち、より理解できるようにした。また、校外学習として横須賀方面にも出向き、同様に気になったものを記録し、葉山町のものと比較することで、相対的に葉山町を捉え直す試みも行なった。

第２学年　単元名
「わたしの理想の町」
　学習のゴールを「葉山町のために自分ができることを考え、実行できる」に設定した。今年度葉山町が町制 100 周年になったことに注目し、まずは「この先も葉山町が持続するためには何が必要か」を考えることから始めた。そのために、町役場の政策課の方から、葉山町の現状や、この先の未来に向けて取り組んでいることについてお話をいただき、考えを深めるきっかけにした。その後、町に対する課題を生徒一人一人が設定し、その課題解決に向けて、実行できることを企画・実践した。企画にあたっては、３学年が葉山町のためになることを企画・運営した経験があることから、３学年に向けて自分たちの企画をプレゼンし、意見をもらう機会を設けた。そこで３年生からもらった意見を参考にしながら、自分たちの企画を見直し、改善を加えることができた。

第３学年　単元名
「葉山未来推進会議」
　学習のゴールを「自分たちの住んでいる葉山町をよりよくする取組について考え、さまざまな人と連携して発信する」とした。１学年では町で取り組んでいるエシカルアクションについて学び、２学年から３学年にかけて葉山町の問題点や未来のまちづくりや地域活性化に課題を見出し、改善方法を考え、実践し、町の一員として葉山町をよりよくするためのアイデアを発信する場とした。修学旅行先の京都でも、自分の取り組む課題と関連のある場所や団体を訪問し、考えを深める材料を得ることができた。

３　実践の成果と課題

（１）教員の成果と課題
　アンケートから挙がった教員の成果として、「中学校３年間を見据えた総合のサイクルの確立を考えていきたい」「小学校で行っていた総合の内容が繰り返しにならないように、教員で改めて共有することが大切」など、自身の考え方を改めることができたという内容などがあった。
　一方で「継続する大切さもあると思うが、系統立ててやり過ぎると総合ではなくなるのではないか」という内容もあった。３年間を見据えて総合の授業を作っていく中で、生徒の変容の実態にあった指導が必要であると感じた。

（２）授業アンケート（生徒からの回答）

前期の２学年のアンケート結果（図１）から（回答者 104 名）「授業では課題、課題の解決へ向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか」という質問に対して全体の９割が「そう思う」という結果となった。他の学年でも同じような結果であり、生徒が課題に自ら取り組んでいると感じているという結果となった。

後期のアンケート（図２）は（回答者 97 名）「そう思う」と回答する生徒が８割という結果になった。他の学年でも大きな変化は見られなかった。今回の生徒からの回答結果を考慮しながら、今後の探究課題設定において、さらに生徒が自ら考えて取り組める環境作りを目指したい。

図１　前期アンケート

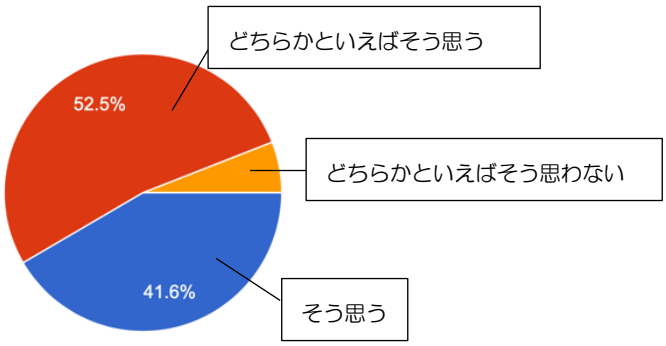
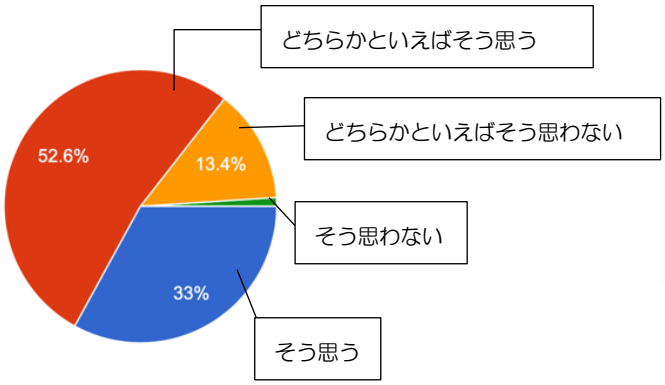


図２　後期アンケート



４　今後の展開

（１）今後の研究の方向性

令和７年度の施設分離型小中一貫教育の開始に向けて、３年間を通して取り組んだ総合的な学習の時間の研究も校内研究で扱うテーマとしては一旦区切りをつけることになるが、今までの研究の成果を生かし、明らかになった課題の改善・解決へ向けて、引き続き取り組んでいく。小学校と研究テーマを連携し、さらに充実した小中９年間の系統的な学びのカリキュラム構築を目指す。

（２）課題解決へ向けて

系統的な学びのサイクルを始めとする３年間の取組を生かしながら今後どのように総合的な学習の時間を継続していくべきかが大きな課題となる。研究を研究で終わらせないためにも、９年間の総合的な学習の時間の全体計画を土台に、各学年の系統性について、さらに具体的な構想を共有し、取り組んでいかねばならないと考える。

探究課題設定へ向けてのより効果的な授業研究の継続と、生徒が自分ごととして取り組むための手立てなど、生徒の実態に合わせた指導や支援について、小中の協力体制をさらに強化しながら、取り組んでいきたい。